



16世紀の終わり、徳川家康の江戸入城以降、幕府による江戸のまちづくりが進められるなかで、隅田川は、両国の花火、墨堤の花見、柳橋の船宿や屋形船など、江戸庶民の遊興の場として、あるいは物資輸送の大動脈として、多くの人で賑わい、多彩な文化が華開きました。

明治以降の殖産興業により、水運の便の良い隅田川沿いには多くの工場や倉庫が立地し、人口が増加した結果、水質の悪化が進みました。特に、経済の高度成長期(1950～1960年代)にはBODが40mg/lに達するなど、河川の環境悪化はピークを迎え、水は黒く濁り、悪臭が周辺にも漂うほどでした。

隅田川では明治以降も両国の川開き花火が行われ、明治38(1905)年からは世界三大レガッタ(ボートレース)とも言われる早慶レガッタが開催されるなど、賑わいをみせていましたが、水質汚濁の影響で、どちらも昭和37(1962)年以降中止されてしまいました。かつて「權のしづくも 花と散る ながめを 何に たとふべき」と親しまれた清流は見る影もなくなりました。



昭和40年代の隅田川



高潮堤防(カミソリ堤防)

一方、明治43(1910)年の大水害をはじめ、東京の下町に水害が相次ぐなか、地下水のくみ上げの増加に伴い地盤沈下が進行し、首都東京を洪水や高潮から防御するための隅田川の治水対策の重要性も増しました。このため、昭和32(1957)年から高潮堤防整備が進められ、昭和50(1975)年にほぼ完了しました。これにより整備された高さ3~4mにも達する直壁の高潮堤防はカミソリ堤防とも呼ばれ、川沿いのまちと水辺を隔てる存在となり、市民に長く親しまれてきた水辺の景観や人々の賑わいが失われました。



人々の憩いの場となっている水辺空間

昭和30年代後半から、流域における下水道の整備が急ピッチで進められ、下水道普及率は昭和36(1961)年の10%から平成22(2010)年には100%に達しました。このほか、ヘドロの浚渫、工場排水の規制強化、利根川からの浄化用水の導入など、水質改善のための取り組みが行われてきました。

また、緊急的に整備した高潮堤防をより強固にし、耐震性を高めるとともに、親水性を復活させることを目的に、昭和55(1980)年度から緩傾斜型の堤防、昭和60(1985)年度からはスーパー堤防の整備に着手しました。特に、スーパー堤防の整備箇所では、背後の市街地再開発や公園等の再整備と一体的に実施することで、より質の高い水辺空間を創出しています。また、これらと合わせて水際部分のテラス(遊歩道)の整備や護岸の緑化などが進められています。

隅田川のBODは、昭和53(1978)年に7.4mg/lとなって当時の環境基準を下回り、以降環境基準を安定して達成できるようになりました。隅田川の水質は大きく改善され、魚や水鳥たち、さらに岸辺の水生植物にも回復の兆しが見られるようになりました。隅田川は「江戸の水文化を蘇らせた下水道整備」として、平成12(2000)年に「蘇る水百選」に選ばれています。

かつての悪臭は消え、水際のテラスなどの親水空間が整備されたことにより、隅田川の水辺には再び多くの人が集うようになりました。花火大会や早慶レガッタも昭和53(1978)年に復活し、観光船の運行も増えて、内外からの観光客の人気を集めています。

東京都では、平成18(2006)年に「東京の水辺空間の魅力向上に関する全体構想」を策定したほか、同年の「10年後の東京」では「水と緑の回廊で包まれた、美しいまち東京の復活」をうたうなど、今後の都市戦略の重要な柱として隅田川をはじめとする水辺空間の魅力向上を位置づけ、さらなる整備を予定しています。



テラス上のビオトープ整備



早慶レガッタ